



マチノコモレビ ～ヒトが紡ぐ、マチの時間～

Introduction

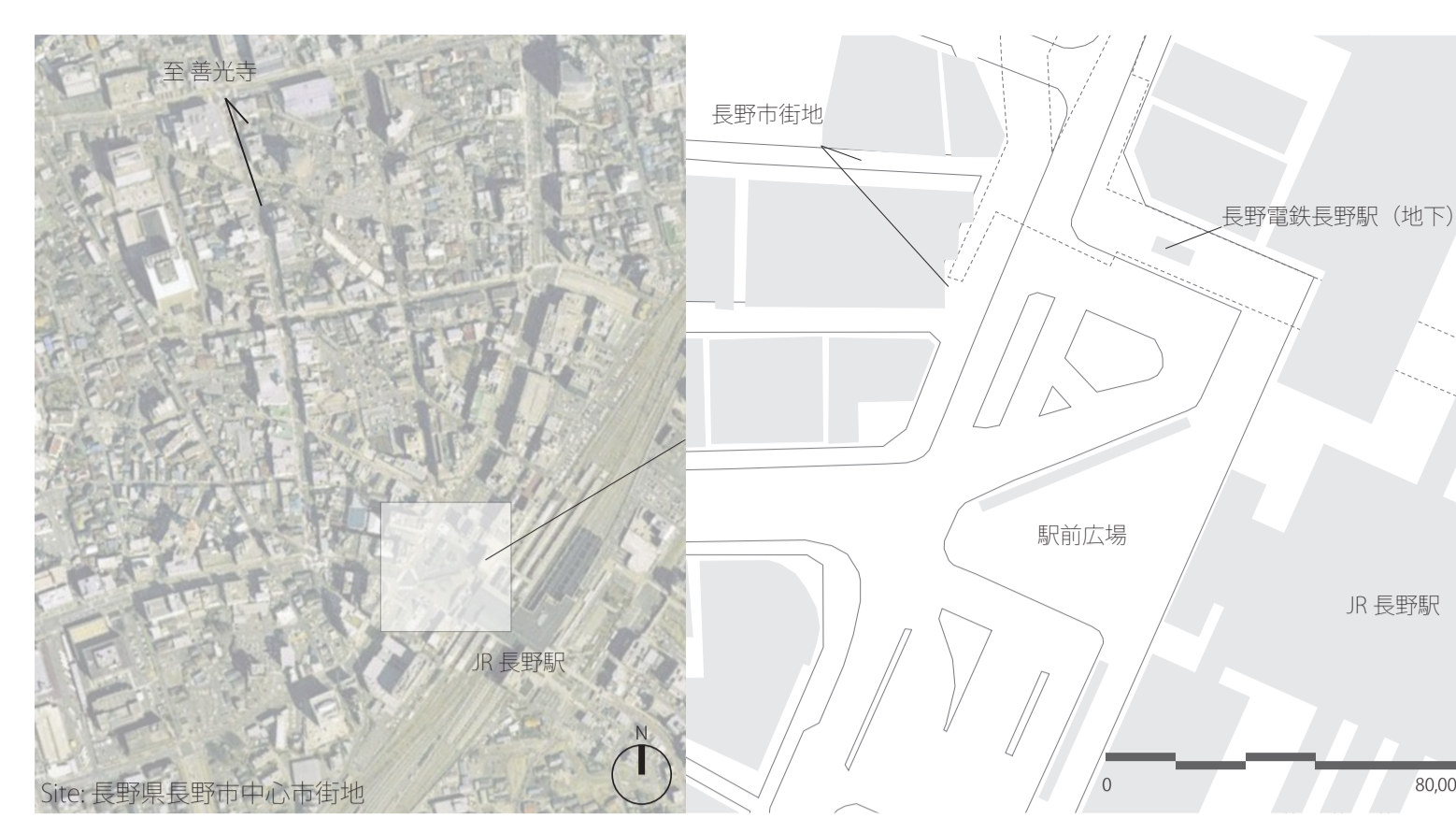
私たちを取りまく大きな自然。それは、人の生活の周囲に存在する“まち”。
私たちが持っている大きな自然。それは、すべてのものに流れる“時間”。

“まちの時間”。

大きな自然を、私たちにとって普遍的に存在するものとして捉え、空間をつくります。

私たちは普段、まちに流れる時間に対して、あまり意識していません。その為、私たちの周囲で刻々と変化しているまちを感じられなくなり、まちに対する愛着や記憶は希薄になってしまいます。そこで、普段は意識されない“まちの時間”を、各々のまち固有の性格として感じられるようにすることが、私たちを取りまく大きな自然に対する呼応になり得ると考えます。本計画では、まちが既に持っている固有の性格として、そこで生活している人々の動きに着目し、それらがつくりだす光と影のコントラストを用いて視覚化し、“まちの時間”を感じられる建築を提案します。人の動きは時間によって流動的に変化し、1年を通じて日々刻々と変化する日時計の如く、“まちの時間”を刻みます。さらに、人の動きがつくりだす光と影のコントラストは、まるで、風で揺らめく木漏れ日のように、空間に優しい変化をもたらします。

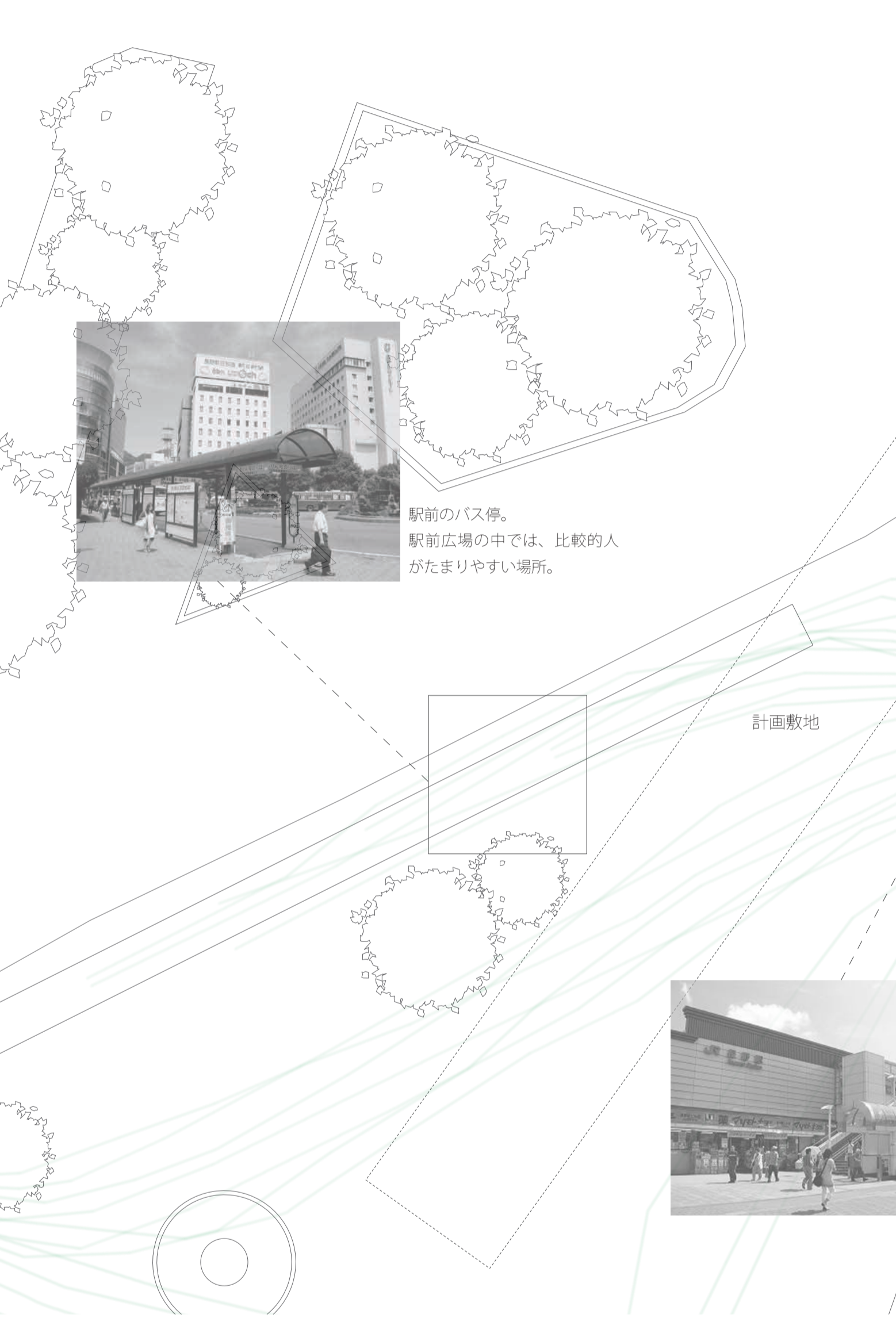
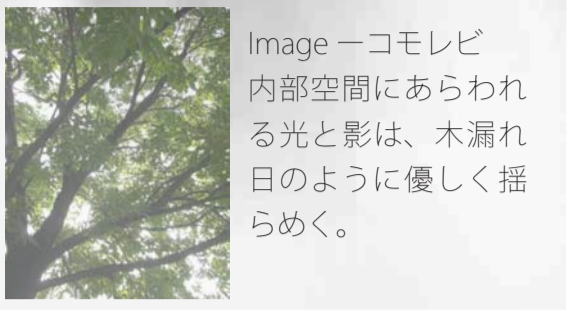
このように、“まちの時間”という、普段は意識されない固有の性格を感じさせる建築こそ、「大きな自然に呼応する建築」に相応しいと考えます。



Location 一刻々に変化する人の動きの存在
 長野県長野市の中心市街地にある、JR長野駅前。
 ここには、JRだけでなく長野電鉄（私鉄/一部地下鉄）の駅もあり、時間帯によって様々な人の流れが存在している。
 通勤、通学、ショッピング、観光などの様々な用途の為に“人が通過する場所”、待ち合わせ場所、バス停、タクシー乗り場、喫煙スペースなど、“人が留まる場所”という、流動と停滞の2つの人の動きが、時間によって刻々と変化しながら共存している。



Concept 一まちの時間と光と影
 内部に向かって放射状に広がる無数の孔は、外部の光を優しく落とし込む。一方、地上では人々が行き交い、無数の小さな孔を無意識のうちに踏むことで、その孔は閉じられ光を遮る。その結果、内部空間にあらわれる光と影のコントラストは、地上の人の動きによって揺らめき、空間に変化をもたらす。それは、まちの時間を示すかのように日々刻々と変化し、普段は意識されない、まち固有の性格として知覚される。

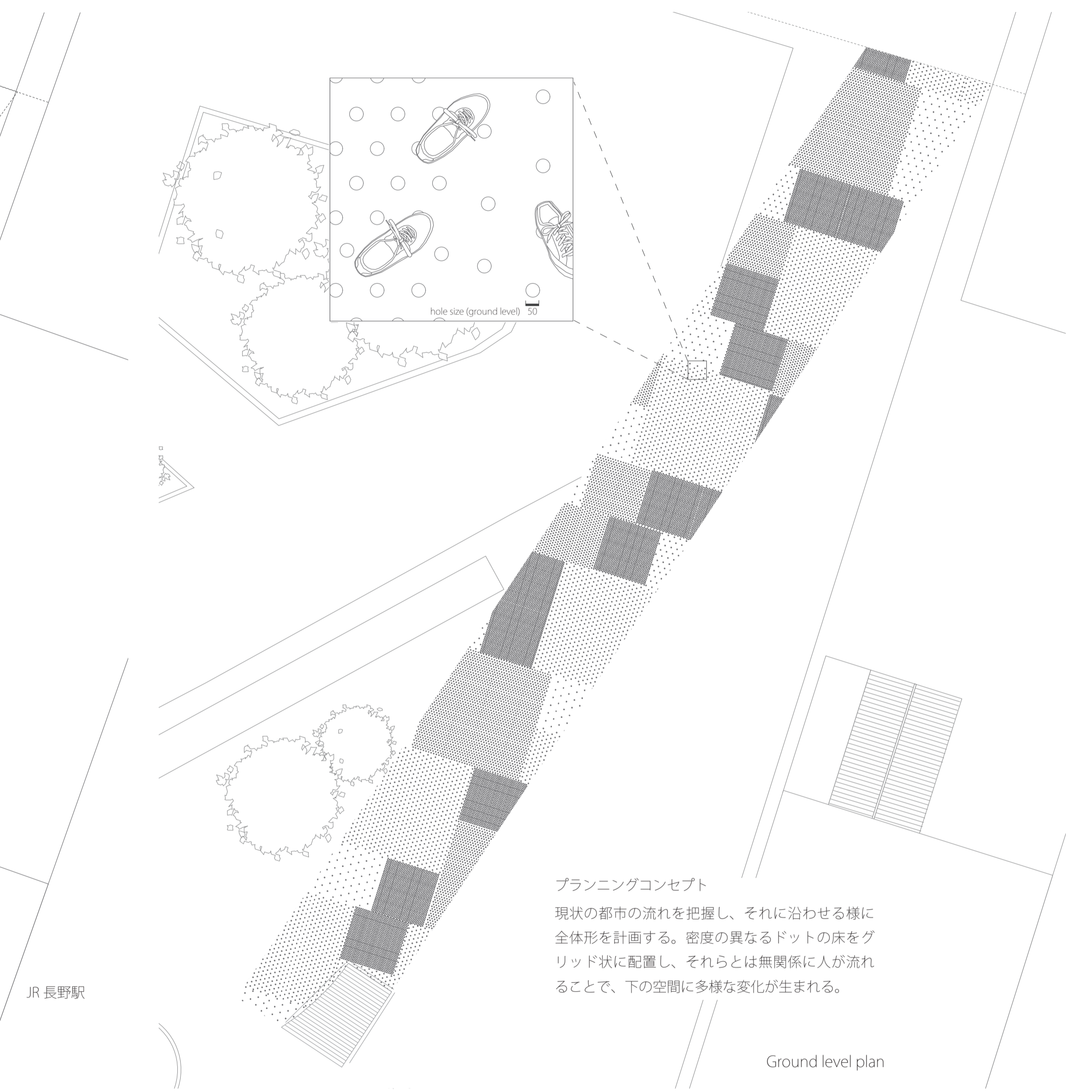


駅前のバス停。
 駅前広場の中では、比較的人がたまりやすい場所。



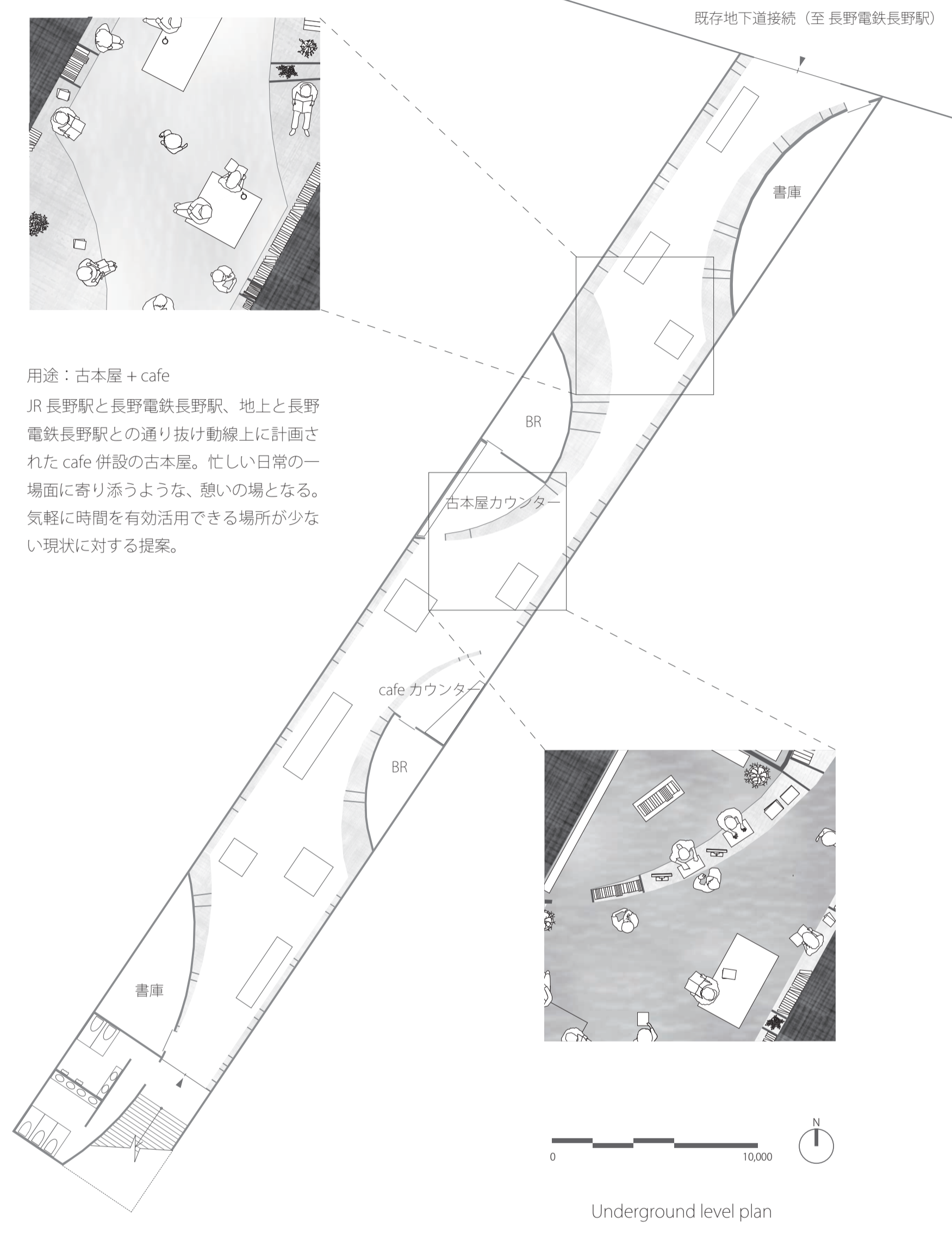
長野駅を通る人の動線が、駅前広場において最も多く重なる場所。この場所に留まる人はほとんどなく、常に人が流れている。

駅前広場の現状【使われ方と人の動き】

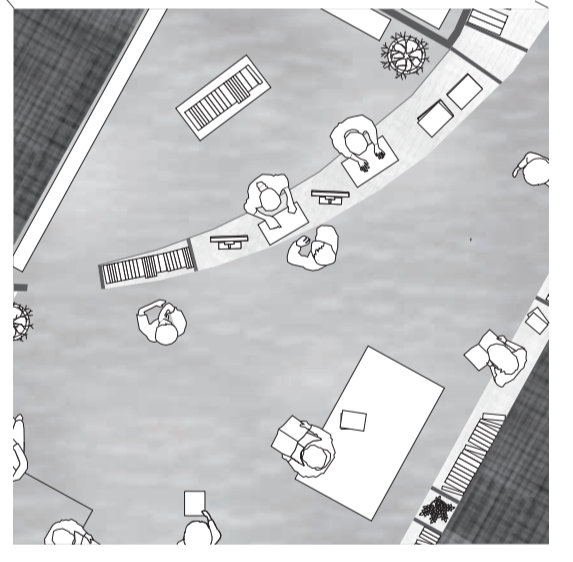


プランニングコンセプト
 現状の都市の流れを把握し、それに沿わせる様に全体形を計画する。密度の異なるドットの床をグリッド状に配置し、それらとは無関係に人が流れることで、下の空間に多様な変化が生まれる。

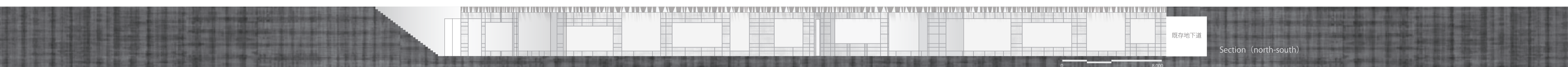
Ground level plan



用途：古本屋 + cafe
 JR長野駅と長野電鉄長野駅、地上と長野電鉄長野駅との通り抜け動線上に計画されたcafe併設の古本屋。忙しい日常の一場に寄り添うような、憩いの場となる。気軽に時間を有効活用できる場所が少ない現状に対する提案。



Underground level plan



既存地下道
 Section (north-south)

